



ゴジラが旭川にやってきた！

9月23日まで
旭川市科学館サイパル
開館 20 周年記念特別
展でゴジラが旭川に上
陸！
1954 年に特撮を駆
使して「ゴジラ」が誕
生！日本のみならず
世界中から人気の高
い存在。特別展では実
際に使われた貴重な
「スーツ」や巨大ジオ
ラマを展示。
ゴジラに会いにサイパ
ルへ行こう！



～予算等審査特別委員会分科会～ 誤解を招く説明はダメ！

2025 年度予算等審査特別委員会分科会で、総務所管と経済建設所管の質疑を行いました。総務所管では、①今津市長の記者会見での発言、②定年延長における職員の処遇に関して、③技術職員の人材確保・育成に向けた取り組みなどの 3 項目。経済建設所管では、経済部に①若者地元定着促進事業、②デザインシステム、③大阪・関西万博共創パートナーについて、取り組み内容や求める成果など見解を求めました。

とりわけ、今津市長が予算概要の記者会見では、市民に誤解を招く説明だったと指摘。その内容は「2019 年度 70 億円であった基金残高が 2025 年度は 79 億円で 9 億円増えた。市債残高は 2019 年度 1,734 億円が 2025 年度 1,623 億円と約 111 億円減った」と説明。誤解を招く内容は、基金は特定目的基金と財政調整基金を合算して比較したこと、財政上重要なのは財政調整基金であり、その財政調整基金だけで比較すると、2019 年度は 38 億円、2025 年度は 39 億円とほぼ横ばい。今津市長が就任した 2022 年度は 89 億円だったが、この 3 年で 50 億円も減っているのに特定目的基金と合算したことで 9 億円増えたと説明しました。

また、市債においても臨時財政対策債とそれ以外の市債を合算して説明しており、臨時財政対策債は地方交付税の財源不足を補うためのもので、どちらかという国の借金。それ以外が本市の借金で、その残高は 2019 年度約 1,143 億円で 2025 年度は約 1,173 億円と約 30 億円、2022 年度との比較では約 52 億円増えていることになります。このように市民に誤解を招くような説明は如何なものかと強く指摘をしました。



旭川市議会議員

高木ひろたか

旭川市議会レポート Vol.21 2025 年 夏号

高木啓尊市政相談室

旭川市永山 10 条 12 丁目 3-3

Tel・Fax 0166(56)3882

http://www.takagi-hirotaka.jp

E-mail info@takagi-hirotaka.jp

～ 後期議会人事 ～

監査委員に就任



第 2 回定例会閉会日に全国市議会議長会から市議会議員 10 年表彰をいただきました。

また、議会の後期人事では、監査委員として議会で承認をいただき、今津市長から辞令交付を受けました。本市の厳しい財政状況の中で、無駄のない市民のための財政支出、効果的な市政運営となっているのか、監査委員としてその役割を担ってまいります。



議会の役割を忘れることなく

日頃よりお支えいただき、ご指導いただいている皆様に心から感謝申し上げます。また、後期の議会人事における正副議長人事では、市民のみなさんにご心配をおかけしました。流会となった第 3 回臨時会での補正予算は市民のみなさんに影響が出ないよう専決で対応いたしました。第 2 回定例会時においても議長職に留まり、議会での紛糾が続きましたが、こちらについても市民生活に影響が出ないよう早急に議決が必要な議案について先議で可決し、また提案されている議案についても本会議にて審議し可決いたしました。

議会人事の問題ですが、私自身まず根本的なこととして、市議会の与党、野党としての区別が私は好きではありません。市議会議員の多くは政党に所属されていますが、市議会は二元代表制の中、市政運営、予算執行の監視、政策の提言など旭川市にとって、市民にとってより良い事業であるのか、市民が求めているものなのかをチェックすることが役割であり、思想信条が違えども国会ではないので市議会に「与党だ、野党だ」ということは相応しくないと感じています。

良い政策には賛成する。ムダだと思ふことは反対する。私が議員になった頃は、より良い政策にするため、政党・会派をこえて水面下で検討し、必要に応じて附帯決議をつけるなど先輩議員の姿を見てきました。今は数の論理が先に立って、会派間での開かれた議論がみられない。そのことが今の議会人事の問題につながっているのではないかと思います。

私は旭川の発展、市民の生活を守ることが第一義であることを踏まえ、今後も市議会としての役割を果たしていきたいと思っています。どうぞ、みなさんからの変わらぬご指導をよろしくお願いいたします。

高木啓尊

いつでも どこでも議会が観られる！

市議会における一般質問や代表質問、議場での質疑や特別委員会の質疑内容がインターネット中継で観られます。また、過去の質問内容も録画映像でいつでも視聴が可能です。是非、ご覧ください。

～ 旭川市議会ホームページから ～

市議会を見る・聞く ➡ 会議録、議会中継 ➡ インターネット議会中継 ➡ 議員の名前から選ぶ



■ 行政視察内容報告（2025 年 5 月 26 日～30 日）

デザインを取り入れたまちづくり

広島県 広島市（ひろしま街づくりデザイン賞事業）



広島市で行われている「ひろしま街づくりデザイン賞」は、昭和 53 年国際平和都市「広島」を創造する「広島市新基本計画」において、「都市美づくり」として優秀建築物及び優秀緑化施設の表彰制度を創設。平成 3 年に優秀宅地開発を新設し 3 つの表彰制度となり、平成 6 年には、これらを統合し「ひろしま街づくりデザイン賞」となる。

令和 6 年度の取り組みでは、①建築物、②個人住宅、③アート、④広告、⑤花と緑、⑥街並み、⑦景観まちづくり活動の 7 部門であり、一定期間募集し（166 件応募）選考委員会が各部門賞を決定。その部門賞から大賞を 1 件選考した。表彰式は、建物内ではなく、市民が行き交う地下の歩行空間で実施し、応募者全員に記念ボールペンを贈呈、大賞には表彰銘板及び盾（写真）を贈呈している。

応募件数も減少傾向にあったことから、平成 12 年度以降 2 年に 1 度の開催に変更。受賞物件はパンフレットやホームページで広く周知される。それにより、訪れる市民等がいるが、その受け入れや対応については受賞者に任せており、とくに個人住宅で受賞された方については、プライバシーの観点から課題だと感じた。受賞した物件に対しての修繕費や維持費等、市からの補助金等は一切なし。

本市においても、平成 2 年度より都市景観賞（第 5 回からは旭川市景観賞）という事業を展開しているが、平成 26 年度の第 6 回からは中断している。ユネスコデザイン都市として認定を受けた本市であることから、街の景観やデザイン性について重要であり、旭川市景観賞の再開と合わせて、デザインを取り入れたまちづくりを進めることが必要であると実感した。



第 19 回ひろしま街づくりデザイン賞（部門賞）地下通路アート

旭川市総合体育館の建て替えに活かす

滋賀県（滋賀ダイハツアリーナ）

滋賀県の滋賀ダイハツアリーナを視察した。PFI（BTO）手法で約 95 億円の建設費で 2022 年 12 月 1 日にオープンした。ここ滋賀ダイハツアリーナをホームとするプロチームは、滋賀レイクス（プロバスケットチーム 2026 年から B リーグプレミアに参戦）と東レアローズ滋賀（女子プロバレーボールチーム・SV リーグ女子）の 2 チームがホームとしている。そのため、メインアリーナは固定席・可動席合わせて最大約 5,000 席の観客席が確保されている。

また、運営は日立キャピタルやミズノなどが出資した共同企業体が 15 年間の契約で指定管理者として運営し、さらにネーミングライツとして「ダイハツ」が年 500 万円 5 年の契約している。ランニングコストとしては、利用料だけでは維持できず建設費用の分割負担を含め、県から年約 4～5 億円の委託料がある。

施設は、メインアリーナ・サブアリーナ（観客席約 200 席）、トレーニングルームに大小会議室、外にはフットサル等ができる人工芝の多目的広場があり、アリーナ横の選手控室などすべてが機能的に使いやすく配置されている。

課題としては、2 つのプロチームがホームとしていることから、アマチュアの方との利用調整が難しい点。プロの興行の際は、トイレ（とくに女子）や駐車場（常設約 500 台・臨時約 400 台）が足りない状況が見受けられるとのこと。個人的には、場所が中心市街地から外れており交通便も課題があると感じた。

本市においては、老朽化が進む総合体育館の建て替えが計画されており、また男子プロバレーボールチームヴォレアス北海道（SV リーグ）のホームとなることもあり、5,000 席以上のアリーナが計画されている。また、建設・運営手法も PFI の他、民設民営での手法も検討されている。今回の視察先では、民設民営は建設した後の運営が重要であり、滋賀県としては厳しいと判断したとのことで、旭川での建設・運営手法はしっかり検討する必要がある。



活かせば資源、だが有害物質など課題も多し

大阪府 大阪市（舞洲スラッジセンター）



大阪市建設局の舞洲スラッジセンターを視察した。スラッジセンターは、これまで脱水、焼却後埋め立て処分をしていた下水汚泥を有効活用するため熔融スラグ化し、建設資材等に利用するために施設として、2004 年大阪市此花区に建設された。

大阪市内には 12 カ所の下水処理場があり、トラックによる陸上での汚泥の運搬には悪臭等の問題があることから、すべての下水処理場とスラッジセンターが地中に埋設するパイプ（汚泥圧送管）でつながっている。地下 1 階、地上 6 階の施設はカラフルなデザインで、外壁の赤色ストライプ模様は「炎」をイメージし、煙突など青色は「海の青・空」をイメージ。住宅のような格子模様は「人の息吹」を感じさせ、煙突上部の金色の輝きは「夢と希望」を表しています。また、バルコニーや屋上には植栽を施すなど、特徴的なその外観はおとぎの国のお城のようで、オーストリアの環境保護芸術家である故フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏の設計は、近隣にある大阪広域環境施設組合の焼却工場舞洲工場と合わせて特別な施設として話題になっている。

スラッジセンターで作られる熔融スラグは、路盤材・砂の代わりの埋め戻し材や盛り土など幅広く有効利用されているが、需要は年々減少傾向にあり 100% 利用されていない。今後の汚泥の有効活用の方向性の転換が課題とのことである。

下水汚泥の有効活用は本市においても重要な課題であり、議会の中でも幾度か質疑が展開されている。大阪市との都市規模の差により、下水汚泥の量にも大きな違いがあり、また有効活用も熔融スラグより肥料化が適していると考えるが、大阪市では肥料化について「供給先がないということもあるが、重金属等有害物質の関係で肥料化はしなかった。熔融スラグは高温により処理した物であり、安定しているため有害物質は出ることではない。」との見解をお聞きし、本市による汚泥の有効活用も有害物質との関連が一番の課題であると考え。今回の視察での内容を踏まえ、今後の議論としたい。